

ウメ

1 品種の選択

(1) 南高

和歌山県南部川村で優良系統として選抜された品種。

花は白色単弁、果実の大きさは23～27gで中位、梅干し用の品種で、結実が良い。
自家不結実性、他家不親和性であるので、親和性のある授粉樹が必要。花粉は多い。

(2) 竜峡小梅

長野県下伊那郡松川町で発見され、昭和37年に種苗登録された品種。

樹勢は中庸でやや直立性を示し、枝梢の伸長は旺盛で細かく密生する。花粉が多く、結実性は良好である。果実の大きさは約3～5gになる。浅根性であるため干ばつや滞水に弱く、窒素量が多く軟弱気味に生育すると胴枯病に罹りやすい。

(3) 小粒南高

‘南高’の授粉樹として和歌山で選抜された品種。

果実の大きさは、18～23gで南高より一回り小さい梅干し用の品種である。

2 植栽方法

(1) 混植

ウメの品種は、自家不結実性のものが多く、1品種のみでは結実しにくいので、他品種を数品種組み合わせることで混植したほうが結実が良くなる。

混植の組み合わせは、開花時期が同じか、やや早いもので親和性のある品種を選ばないと受粉が悪くなる。

また、ミツバチなどの訪花昆虫により授粉が行われるので、活動しやすいように、開花期に季節風が直接あたる園では、防風林などを設置する。

♀ 品種	南高	改良内田	玉英	小粒南高	竜峡小梅
♂ 品種	高	田	英	高	梅
南高	×	○	○	○	
改良内田	○	×	○	○	
玉英	×	×	×	×	×
小粒南高	○	○	○	×	
竜峡小梅					○

○：親和性有

：親和性有

るが開花時期
がやや異なる

×：親和性無

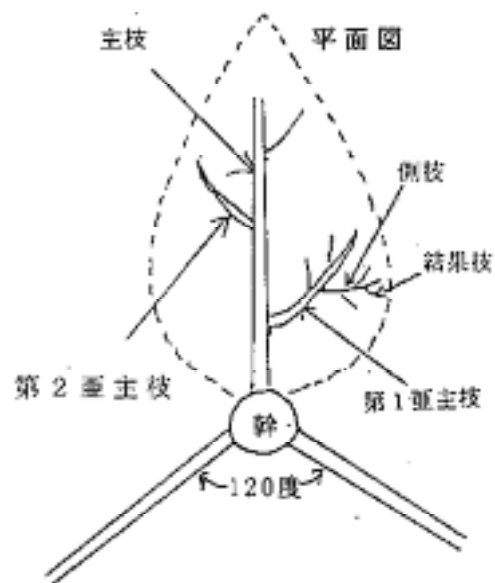
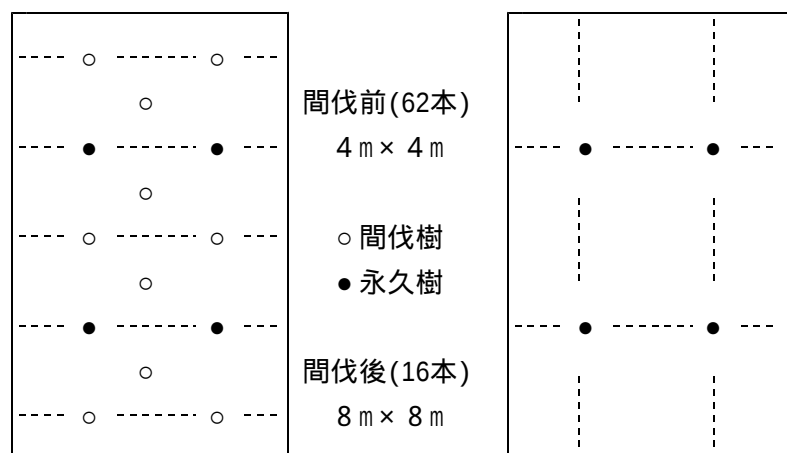


表1 交配親和性

(2) 栽植密度

ウメは、樹齢が長く、樹も大きくなるので、株間は広くする必要がある。しかし、最初から広い間隔で植えると、盛果期に達するまでの土地利用率が低く、収益もあがりにくいので計画密植（最初はある程度密植10a当たり40本程度の密植にし、過密にならないよう早めに計画的に間伐を行う方法）を行う方がよい。

最終的な栽植密度	
6 m × 6 m	16 ~ 27本 / 10 a
8 m × 8 m	



(3) 植え付け時期

ウメの休眠期間は短く、根の活動も早く、年内に新根の発生がみられるので、植え付けは12月上旬までに植えつける方がよい。

3 整枝剪定

(1) 基本樹形

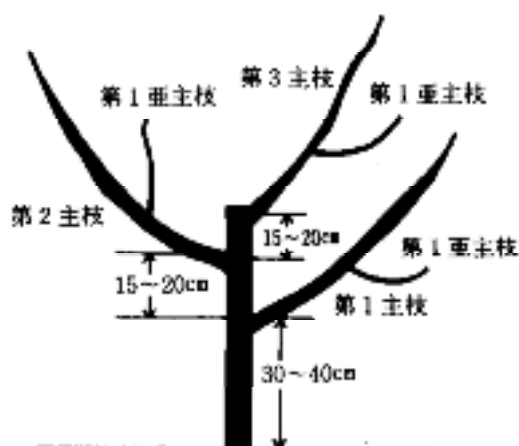


図 完成基本樹形（側面図）

ウメの樹は開張性の性質があるので開心自然形が一般的に行われている。開心自然形は普通3本主枝をつけ垂主枝に側枝をつけて形を作る。

若木の時期に整枝を厳格に行うと徒長して結果枝の確保が不十分となるので、若齢樹の間は枝の数をやや多くし、7～8年目に主枝3本の開心自然形になるように整枝する。

(2) 樹齢別の剪定の目的と剪定方法

	幼 木 (4年生まで)	若 木 (5～10年生)	成 木 (11～20年生)	老 木 (20年以上)
目 的	結果枝確保 樹冠拡大 主枝・亜主枝 の配置 早期結実(成癪)	主枝・亜主 枝の確立 樹冠拡大 樹勢に応じた 収量増加	側枝の更新 収量を高レベ ルで維持	側枝の若返り 収量維持 徒長枝利用
剪定強弱	弱	やや弱	中	強
高頻度の 剪定方法	ねん枝 誘引 間引き	間引き主体 樹の縮間伐 ねん枝	組合せ(切返 し+間引き) ねん枝	切返し主体 巨大化した側 枝の若返り間引 更新

(幼木)

苗木を植え付けてから4～5年までは、早く樹を大きくし、結果枝の数を確保して初期から結実させ、多くの果実を収穫できるようにする。

ウメは3年目には果実を成らせることができる。そのため、できるだけ結果枝の確保に努め、強剪定を避け、成り癪をつけてから徐々に多めの枝を整理して、主枝、亜主枝を配置する。

(若木)

5～10年の間は、樹冠を徐々に拡大させて収量を増加させる。主枝・亜主枝は毎年まっすぐに伸長させるようにするとともに、主枝と主枝の空間に新しい亜主枝を配置し、樹冠を拡大する。

7～8年目には、密植状態になり収量低下につながるので、永久樹の日当たりに注意しながら収穫直後に縮伐や間伐を行う。

(成木)

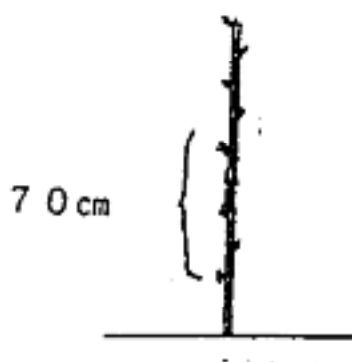
成木になると、主枝・亜主枝に側枝をうまく更新・配置する。3～4年の間隔で新しい側枝に更新されていれば、結果枝(中果枝、短果枝)の確保も十分となり、収量も長く維持することが可能となり、経済樹齢も延長される。

(老木)

幼木とは逆に老木は樹勢が弱くなるので樹勢の維持と収量の低下を防ぐ。側枝の若返りをはかり、時には亜主枝まで若返らせて樹勢を維持する。これらの若返りを順調に行うことができるように、徒長気味に伸びた枝の発生が適度にあるように強めの剪定を行う。

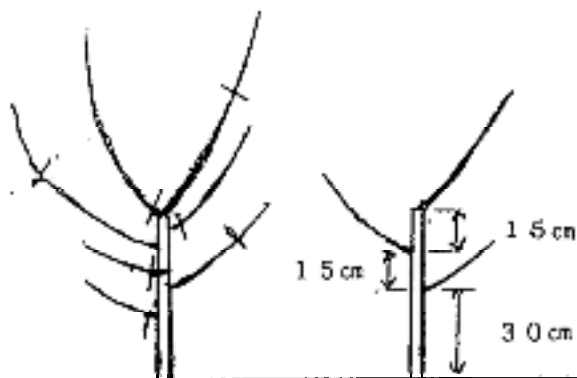
(3) 植え付け後からの基本樹形の作り方

植付け時



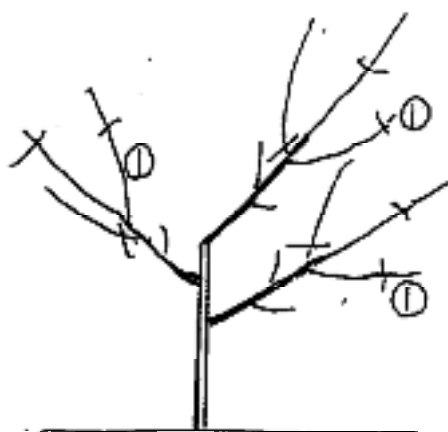
地上70 cm位を目安に充実し芽の上で切り返す。不良苗は2～3芽残して基部から切り、やり直す。

1年落葉後



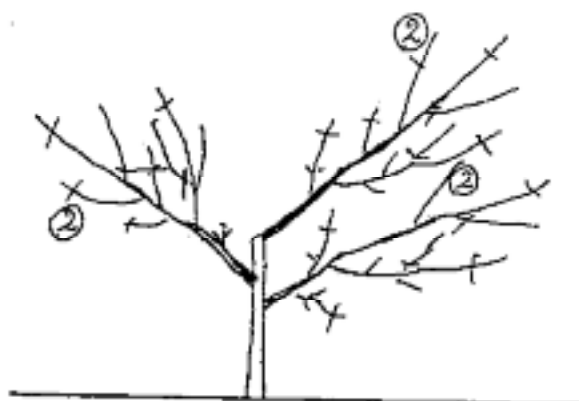
主枝候補枝を決める。発生位置、方向は標樹形に近づくようにする。主幹からの発生角度の広い枝を選び、上段(第3主枝)ほど強い枝とする。主枝候補枝は外芽で1/3程度切り返す。

2年後



主枝先端は競合する枝を切り、1/3～1/4程度切り返す。垂主枝候補枝を地上1～1.2 mの高さで外側に伸びている枝で主枝が負け枝になるのを避ける為、主枝の1/2以下の太さの枝を選定する。

3年後



前年と同じように、主枝・垂主枝の先端を切り返すが、年々やや強めに行い樹形を作る。第2垂主枝は3～4年目にとり、第1垂主枝との間隔は1 m位とする。樹形を乱す枝は早めに除去し、弱い枝は残すようにする。

主枝、垂主枝、側枝の骨格となる枝は、丁寧に切り返すことが大切である。通常の場合、伸びた枝の先1/3ぐらいを切る。そして、その枝の構成に邪魔になる枝だけを剪除し他の枝は残し、幹や主枝などの肥大を図る。

剪定だけでは、樹をコントロールするのは困難なので芽かき、ねん枝、夏季剪定などを行い樹形を維持する。

(4) 芽かき

春に葉が3～4枚出た頃、新芽のうち主枝、垂主枝の上面から発生する芽や枝先の色が赤い徒長するような芽を、新芽の基からかきとる。

(5) ねん枝

5月頃に枝がなくて空間の多い場所に、徒長枝となりやすい状態の新梢や勢いのある枝を、水平になるようにねじり曲げておく。こうしておくで、徒長枝にならず生長が抑制され、適当な側枝とすることができる。

(6) 夏季剪定

樹冠内部への日当たりをよくし、貯蔵養分の蓄積を促進させるために行う。

時期は、果実の収穫が終わり、新梢の発生のない夏季(7月頃)に間引き剪定する。枝葉を取り除くので、過度の夏季剪定は同化養分の生産を減少させることになるので、 unnecessary 徒長枝を間引いたり、下方の枝への日当たりを妨げている重なり枝の除去する程度に行う。

4 結実管理

(1) 結果習性

ウメの結果習性は、モモと同じように一年生の枝に花芽ができる。その花が咲いて受精結実する。つまり、昨年伸びた枝に今年花芽がつき結実する。

ウメの葉芽は、三角形で色は黒褐色で、花芽は丸みを帯びて色は淡褐色。

この花芽は新梢の1～2cm程度のものから、1m近く伸びた発育枝にまで形成される。

一般に長い枝(長果枝)についた花は、結実が悪く、結果枝として適さない。3～15cmの短果枝によく結果するので、主枝、垂主枝にできるだけ多くつけるとよい。

長すぎる発育枝はそのまま残すか、あるいは先端を軽く切り返しておくで、翌年にその枝に短果枝が多く着生し、結果枝群をつくることができる。

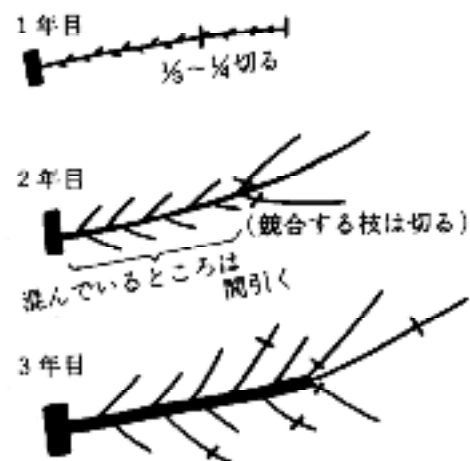


図 側枝の作り方

(2) 摘果

着果過多になると、その年の果実を小さくするばかりでなく、翌年の結実にも影響を及ぼすので摘果を行う。一般に結果枝が長いほど果実の肥大が悪く、小玉果が多くなり、短果枝ほど果実の肥大も良好で、大玉果も多くなる。

しかし、過度の摘果は収量が上がらない。大玉果を生産するための目安として、葉数は10～20葉がよい。果実の間隔と結果枝の新芽の伸び方で調整する。

摘果の時期は、4月末から5月上旬におこる第1回の生理落果終了後の早い時期に行う。この時期は果実の肥大が盛んなときだけに、摘果が遅れれば肥大が進まないのに注意が必要である。

摘果の手順としては、

大きな果実を残して傷害果、病果、奇形果を落とす。

新梢は発芽・展葉中のため葉数が未定であるので、発芽状態を考慮して、果実の間隔を5～10cmに1～2果残すようにする。

大果種で、短果枝1～2果、中果枝5～7果、長果枝10果前後残すようにする。また枝の太さで加減し、太い中・長果枝は多めに残し細い枝は少めに残す。

5 施肥

ウメの開花、結実、幼果の発育は、前年の貯蔵養分によって行われ、また、早くから根が活動を始めるので、収穫直後と秋の早い時期に重点をおく施肥を行う。

(1) 礼肥

果実の収穫が終わった後(6月～7月頃)に、葉の同化を盛んにさせ、枝や根に十分貯蔵養分が蓄積されるように、新梢の伸長が停止する7～8月頃に施す。

(2) 基肥

枝梢の発芽、伸長をよくし、結実を促進させる目的で、落葉後の11～12月に施す。冬期の根の活動は、1月にはいと始まるので、それまでに施して新梢の確保と結実に努める。

ウメの施肥基準

(10a当たりkg)

樹齡	施肥時期 成分	11月上旬	11月下旬 基 肥	6～7月 礼 肥	計
10年生	N		11	4	15
30本	P ₂ O ₅		10		10
1,5t	K ₂ O		11	4	15
	苦土石灰	100			100

樹齡別施肥基準

成分 \ 樹齡	1 年	2 ～ 3 年	4 ～ 6 年	7 ～ 9 年	10 年以上
N	3	5	9	12	15
P ₂ O ₅	2	3	6	8	10
K ₂ O	3	5	9	12	15

6 生理障害

(1) 生理的落果

ア．生理的落果の時期と原因

生理的落果の起こる時期は、大きく2つに分けることができる。最初は、小豆大まで肥大した頃で、その次は、5月中～下旬の硬核期といわれる果実肥大が小休止する頃におこる。

第1回目の生理的落果の原因は4項目考えられる。

不完全花や不受精果が落果する。

貯蔵養分が少ないため落ちる。

開花が極端に早かったり、開花期の天候が悪い。

強剪定や窒素過多のため葉芽の発芽に養分移行が偏ると落果が多発する。

第2回目の生理的落果は、前年の貯蔵養分から、今年伸びた新梢で生産される養分へ切り替わる養分転換期に起こる。原因は6項目考えられる。

着果過多等により養水分の競合が激しくなった場合。

雨天や曇天が続いて日照不足のために同化養分が欠乏した場合。

窒素過多、強剪定で枝の伸長が強すぎた場合。

窒素肥料が甚だしく欠乏した場合。

アブラムシなどによる病害虫の被害で葉の活動が十分でない場合。

土壌の過湿・過乾。

イ．生理的落果の防止策

第1回目の生理的落果の防止策としては、次の通りである。

着果過多をさけ、次年の花芽の充実をよくして不完全花を少なくする。

受粉樹の混植や、防風垣の設置などにより訪花昆虫の活動を高める。

貯蔵養分が多くなるような管理の徹底。

第2回目の生理的落果の防止策としては、次の通りである。

剪定を行い、葉に日光が適当に当たるようにすること。

極端な窒素過多にならないような施肥に注意する。

結実量が多すぎる場合は第1回目の生理的落果後に摘果する。

病害虫防除を行い異常落葉等を防ぐ。

排水対策を行って有機物を補給し、土壌の保水性、排水性を改善する。

(2) ヤニフキ果 (ホウ素欠乏障害)

ヤニフキ果は、大玉果に発生が多く、小玉果に少ない。樹齢との関係を見ると、若木ほど発生が多く、ある程度樹齢を経ると少なくなる。

また、窒素過多で新梢の徒長が多い樹ほど多い。

防止策としては、果実の肥大の盛んな5月頃に、ホウ素を土壤に施用するか葉面散布すると発生量は低減できる。土壤に施用する場合は、10a当たり約2kg(1本当たり20～50g)のホウ砂を実肥と混ぜて施す。葉面散布のする場合には、5月中に1～2回、0.2～0.3%のホウ酸を生石灰半量加用して実施する。

この時、生石灰を加えないと、葉がヤケ症状がでて早期落葉するので、注意する。

(3) 日焼け

ア．果実の日焼け

果実の果頂部や果肩部の日のよくあたる部分に、淡褐色の斑点ができ、大きくなって5～10mmの大きさになる。障害部分はくぼみ、果実の内部をみると果肉は褐色に変わり、ときには空隙ができ、その空隙に樹脂が詰まることもある。はなはだしいときには果実が落下する。

防止策は、深耕をして通気性、保水性をよくし、活力の高い細根群を多く維持する。

腐植やホウ素の土中含量を高める。

果実の日焼け障害にかかりやすい品種‘鶯宿’などは避ける。

イ．樹の日焼け障害

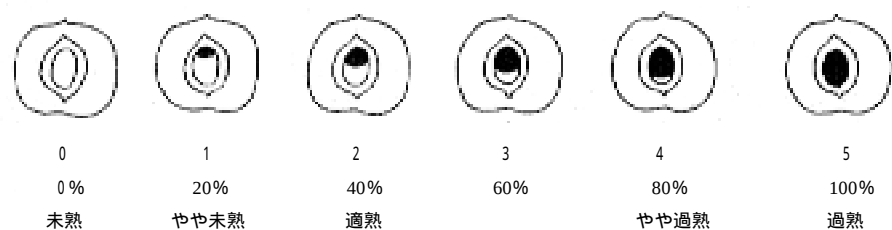
太い主枝、亜主枝、主幹部がはげあがって、直射光線を受けると、その部分の樹皮が日焼けで枯死し、やがて木質部も枯死する。主として樹皮の高温障害が原因である。

主枝、亜主枝の周囲に側枝を配置して、日光の直射を避けたり、根の吸水と主幹の通水障害を避けるため、被害部に白塗剤を塗って乾燥を防ぎ、結実量を制限して樹勢が弱らないよう管理に努める。

7 収穫調整

(1) 青ウメ用

青ウメの収穫適期は果実を縫合線にそって切断した時に、胚の白色固定部分が約40%の大きさまでに発育し、核が僅かに褐変し始めた頃か、表面の毛茸が消失し始め、光沢が現れた時を目安にする。果色は緑色で軟化していない果実を収穫する。収穫は、午前中に終わるようにし、露が残っていると品質の低下を招くので、露が乾いてから収穫するようにする。また、主枝の先端の大玉果からとり始め、小玉果はとらないようにする。



青ウメ用熟期の判定

（２）漬けウメ用

漬けウメ用は青ウメ用よりさらに熟期が進み、白黄色になってから収穫を行い、指で押さえて少しへこむ程度がよい。あまり過熟になると、漬け込み後に果肉の肉崩れをおこすので収穫の時期を失わないようにする。

８ 失敗しやすい作業

（１）サクラ切る馬鹿、ウメ切らぬ馬鹿

健全に生長しているウメは、枝の分岐している部位から徒長的な新梢が発生しやすくなる。基本的には剪定時に切除するが、切りすぎて（間引き過ぎて）枝が出ている部分が無くなり樹の日焼け障害になる可能性もあるので、極端な切り過ぎに注意したり、捻枝をする。

（２）春植えの定植は生育が劣る

多くの果樹の定植適期は秋と春があるが、ウメの根の成長は、他の樹種に比べると早い。そのため秋植え定植を心掛ける。春植えはどうしても生育が遅れ、新梢の伸びが細く短くなる。

引用文献

果樹栽培ハンドブック

滋賀県